

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成16年3月号

平成十六年三月一日発行 第十四巻第三号 通巻第一五三号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 初明り

高橋将夫

初明りして青ナイル白ナイル

天狼や王家の谷の鳥瞰図

天狼やロゼッタ石もパピルスも

灯火のもとに灯火色の雪

三ヶ日六万踏むがごとく過ぎ  
千両よ万両よほれ陶狸

雪女からのメールを待つことも  
大寒のチューブを終いまで絞る  
得手札を膝元に置くか  
かな  
冬霞ホワイトホールよりきたる

星雲の星の一つに冬籠

# 四国遊遊

前田美恵子

着ぶくれて讃岐平野の真中なり  
臍括る仏生山の大西日  
寒凧の三鈷の松の震へかな  
星飛ぶやレンブラントの影のあり  
菩提樹の実を拾ひをる和讃かな  
八栗寺の二天門出づ木葉木菟  
土俵際いつぱい阿波の古狸  
黒潮のほひのしたる秋遍路  
梵鐘の冴返りたり壇の浦  
朝霧の四万十川へ漕ぎ出だす

特別作品

逆 転 の 発 想 あ り き 蒲 団 干 す  
足 摺 の 灯 台 守 り 寒 椿  
寒 月 や 潮 目 は つ き り し て き た る  
勇 魚 鳴 く 戦 は ず し て 維 新 か な  
浮 玉 の 転 が つ て を り 冬 の 浜  
初 夢 や 咸 臨 丸 に 乗 り 込 み し  
冬 ぬ く し 打 つ 付 け 本 番 五 人 衆  
隙 間 風 諸 共 と せ ず 鮎 鮎 食 ぶ  
寒 晴 れ の 一 人 歩 き の 振 り 向 か ず  
五 剣 山 四 国 遊 遊 冬 に 入 る

# 槐安集

市場基巳

まなかひに蛇ながれゐて日の冷ゆる  
こほろぎの川のまひるに鳴きほそる  
小春日や居さうにおもふ蛇を見ず  
蟻螂を枯らして日差しやはらげる  
しのび寄る冬をうながす昼の月

水野恒彦

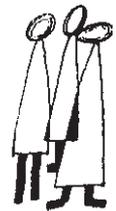
夕空の絶へなんとして牡丹焚  
漲つて月漲つて冬の水  
身の中に夕闇抱き雪女郎  
峰に雪降らしめて神遊びをり  
沖の紺ゆらぎし白金懐炉かな

石脇みはる

黒鳥や笙の譜面を広げゐて  
冬の雷風の六波羅蜜寺かな  
さまざまな容りに冬山ありにけり  
極月の奈良に阿修羅を見たるのみ  
大年や祝儀袋をしつらへり

竹内悦子

円柱をのぼる三毛猫十二月  
抜く足の行きどころなき慈姑掘  
あんこうの吊るされて大欠伸かな  
硯など並べて師走あたたかし  
引きづりて掛けるほだわらあと一寸いっすん



木下野生

十二月八日ひめくり日捲めくるのみ  
梟や線香半ばまで灰に  
枯芦原に十二時の時報かな  
寒き日のうしろより来て人のこゑ  
是が非でも忘年会にゆくつもり

中島陽華

大年の水がいいぞなマドリード  
狂言や湯豆腐するりとそれにける  
梵天はまねきの上に霜の朝  
湯上がり知らぬ子のをり空也の忌  
床の間の獅子柚子なりしスフィンクス

延広禎一

摺鉢にハムスターをる神の留守  
船箆笥をそびらにしたりけつとばし  
榎山へ枯れの蠟螂はつとばしなまぐさき  
口上の睨みの見得や金目鯛  
貝塚に河豚の骨あり沖つ海

栗栖恵通子

体内の石の転がる冬野かな  
しはしはと狐火沼の面テかな  
巻尺を押さへてゐたり去年今年  
天照大神あまてらす枯葉に彩のありにけり  
肚抜かれたる鮫鱈の笑ひをり

加藤 みき

菜を茹でて冬のさみどり賜はりぬ  
裏白に始祖鳥の羽根集まりて  
直つる夜の空の彼方のうすあかり  
冬ざるる鳥の嘴つやつやと  
枯芭蕉天道に星あつまりぬ

大島 翠木

冬桜ほくろが一つ顎の下  
灯してさて鮫鱧の釣るし切り  
師走満月くちの開かぬ貝ありぬ  
かと思ふ生絹すずしの肌の雪女郎  
天狼や土竜の道を踏んでゐし

岡井省二全句集

句集『明野』から『大日』までの  
全句集十一巻を収録。  
解題、年譜付き、A五版、五〇〇頁。

定価三、八〇〇円（消費税込）

角川書店発行（平成十五年十一月）

申込先 千五三六一〇〇〇八  
大阪市城東区関目二丁目二二―二  
高橋将夫  
〇六一六九三四―五四九〇

北嶋美都里句集

『西の峰』 本阿弥書店発行

定価二、八〇〇円（消費税別）

申込先 千五七〇一〇〇九八  
守口市新橋寺町四一八  
北嶋美都里宛



# 槐市集

岩下芳子

師の肩の光つてをりし初しぐれ  
物識りの逝つてしまひし冬桜  
凍星の鋭き色と鈍き色  
わらわらと鳥飛び立つ波の花  
河豚鍋やにこにこ来る哲学者

植木戴子

太陽の黒点見たる去年今年  
丹頂の舞上りたる水の青  
枯菊をひとつところに多羅尾かな  
きりたんぽに弾力のあり杉の箸  
外科病棟待合室のシクラメン

植松美根子

銀杏のはなしのあとの読経かな  
ドーナツの湿つてきたる時雨かな  
深海の底の魚や十二月  
石だけの社の雑木黄葉かな  
日々の大根絶やすな水仕事

宇田喜美栄

薄氷や沼に家鴨の二羽泳ぐ  
歳末の雨降つてをる留守居かな  
襟立てて山をみてをり雲はやし  
吹き晴れの小諸のまちの晦日蕎麦  
極月の一千人の第九かな



# 槐集

## 高橋将夫選

つゆの身のつゆの世ながら皮衣

枚方

中野 京子

立冬の灰吹かれたる脛腓

枚方

雨村 敏子

桐一葉朝の納豆かきまはす

見えるもの見えないものも御神渡り

影と来て日当りながら去年今年

草の絮吹かれゆくなりユーモレスク

雪吊りの仕上がつてをり一の膳

冬の雨千年櫃のぬくみかな

山頂に波切不動やふぐと汁

身を寄せて父の爪切る外は雪

天蓋に菊紋のあり冬木の芽

銀狐笹生の闇のしづかなる

豆莢はたき小春の空のあり

瓔珞や風の筋みえ銀杏散る

西の京のしぐれてあたり塔ふたつ

冬晴や星のブランコこぎ出す

谷村 幸子

口中に山の音する冬林檎

岡崎

近藤 喜子

冬銀河けものの耳の尖るとき

狼のこゑ森の気の集まり来

吹き晴れや冬満月の宙吊りに

月光の色とどめたる青海鼠

裸木を叩けば髓の音すなり

初葉師土竜の穴をふみにけり

崑玉の星空を知る海鼠かな

寒鴉のろのろしてはをられぬぞ

とよみぬる寒の石音五大かな

近藤きくえ

本多 俊子

# 銀河往來

## 高橋将夫

### 萬物照應劇場

水母からがんがぜまでの深さかな　高橋 将夫  
「葦（十二月号）」の「自習室―現代俳句を読む―」のなかで小島良子氏が掲句を見事に鑑賞されている。ここに、その全文を紹介しておく。

水母はいいとして、がんがぜとは何だろう。手もとにある小学生の魚貝類採集図鑑を開いたら、「こわいもの」という頁にうつば、ごんずい、いしがに、いもがいなどに混つてがんがぜの名があった。

雁甲（カガ）はがんがぜ科のうに、殻の径八センチ、刺の長さ四センチ、刺は折れやすく有毒であることも判つてきた。刺の長さには驚く。うには糸状の管脚を刺の間から出して歩くので、これはかなり異様な姿だと思ふ。

傘の周囲の刺胞に毒を持つ水母には何回か刺されたことがあるが、いつまでも痛い。水からあげると有耶無耶な形になってしまうこの寒天質の不思議な生き物も怖ろしい。

水母は水面近くに居て、そのずっと下にがんがぜが居る。それがどうしたと言われると困るけれども、二者がなんとなく牽き合いながらそれぞれの位置にいて、精いっぱい自己防衛の手段を講じているのである。海の中の生き物達の花ひらく命の緊張感も伝わってくる。なによりも、水母からがんがぜまでの深さ、と言ったところが詩である。そして切字のかなが、一句のすべての意味を背負って、紛れもない俳諧を立ち上げている。

密教的俳諧展開、俳諧的密教展開を唱われた「槐」岡井省二先師の詩精神の、強烈な余光を感じとる次第である。〓  
今月の「槐集」には、先師の詩精神を感じさせる句がとりわけ多かった。

つゆの身のつゆの世ながら皮衣　中野 京子  
「つゆの身」「つゆの世」：諸行無常。古典の世界。しかし、皮衣で観念に血肉が通った。現実を引き戻された。

山頂に波切不動やふぐと汁　谷村 幸子  
波を鎮めるお不動さんが山頂にあるところが興味深い。口にしたふぐと汁は、きつと格別の味だったことだろう。

銀狐笹生の闇のしづかなる　近藤きくえ  
闇の中に銀狐がほかに浮かび上がる。銀狐がクールなだけに、笹生のやさしさが引き立つ。

さよならの日の一枚は朱の袷　雨村 敏子  
さよならの日にもらった着物の一枚が朱の袷だった。なんと詩的に俳諧的な別れであることが。

冬銀河けもの耳の尖るとき　近藤 喜子  
けもの耳が立つた。何かが迫ってくる。冬銀河のもので、生きるための闘いが始まる。  
(以下略)